

條野傳平輯  
近世紀聞

自安政六己未  
至文久二壬戌

卷之三

洋学文庫

文庫 8

C 219

3





近世紀聞初編卷之三

東京

條野傳平輯

條野傳平



○五ヶ國互市の條約以結ぶ

復說東武よ於と彦根中將太老職よ任ぞうれしあり  
引續いゝ太田入道道醇鯖江侍従西尾侍従等咸閣  
老よ再任を是より嚮よ亞墨利加の使節ハルリス  
も姑く自國の喪よ係りて彼返答をも猶豫せしが  
又此頃よ至りて厳しく催促よ及ぶ程よその他  
魯西亞英吉利佛蘭西の軍艦も追々小渡来して各



通商の條約と逼る小ぞ彦根中將思ふやう今我が  
 國の危ふき支實小薄氷を踏ぐ如きを 朝議小依  
 りて所置せんとして萬一絆を過ぐに至り一回兵  
 端を開く時ハ各國總て敵とありて防禦の術計を  
 ろるべし蓋し天下の安危を量りて其宜しき所  
 決做せ支是れ將軍の職掌ありて奚ぞ清國の轍を  
 踏ぐ危き小臨まんやとて終小亞人ハリスに神  
 奈川に於て條約を結び印信を遞与せしむ魯西亞  
 英吉利佛蘭西等も俱に條約不及びて此旨京師へ  
 奏聞ありしハ 朝議いよく穩らありしに此時は

方りてや報國有志と稱ふる者漸次小沸騰し中小  
 も惴雄の輩も慷慨の餘り小幕吏 詔令小應ぜ  
 ゐしと 朝憲を輕蔑做せ糸最も不敬至極あり杯  
 更小憚る気色をもなく口張開いて罵る小此頃よ  
 且攘夷の説大いに起り五月所司代岡崎侍從閣  
 老に轉任ありて關東へ發途あり小伏見奉行内  
 藤豊後守京都取締として京極荒神口小新邸を造  
 営し這所は在る京伏見の仕置を兼任せ其實を頃  
 日 朝威を募り幕吏の所置を譏る者多く徘徊を  
 まが故に密々穿鑿の為ありとぞ其以前關東より



も開港鎖港の論よ於るを評議區々ある所彦根中  
將の権断小よりと 勅旨をも奉戴せむ既よ開港  
を許さし一うバ水戸老疾より深く此儀を歎けられ屢  
諫書を呈し一うと雖も採用更小ふく又土州侍從信  
肥前少將正齊仙臺少將邦慶因州少將德宇和島侍從宗  
津山中將倫慶等の六疾小も鎖港攘夷の建白を捧げ  
専忠諫せし一うと是以て用ひられむ咸徒らふあり  
事偏へ小彦根中將の我意よ出たる夏と沙汰して衆  
人憎む一うとを儲此年の六月より海内一般に疫  
癘流行す此病勢最も尖く始め卒然と発熱するより

俄り小吐瀉する夏甚しく總身冷へ且つ轉筋し  
悶へ苦しむ夏兩三日小しと死する一うり烈き小至り  
て一日或多半日小く斃る故小世俗よ三日コロリ  
と云ふ後より僅う一時病と又即時小死するも  
一うりコロリと病名を喚びる衆咸大り畏怖  
做せり這も西洋小くコレラ病と言はると以て憚る  
訛り唱えし一うり原此病ひ東奥の邊より發し  
終に西國迄傳遷せしガ從來本邦よ例尠き一種  
の異病なるが故よ老醫もいまも治療に慣む是ガ  
為よ全國小く死する者凡三千萬人よ及べし憚る



折々 將軍家公家定少も此疫病あまきびやも在りけん僅々小  
 一日の病著ふ甚く悩まうせ給ひつ七月八日は薨去  
 りり壽三十五歳とぞ聞ゆ斯る僅々の凶變なれを  
 營中の周章大方多しむ上下悲歎よとさるるが未だ  
 幼君も在りまを何れを嗣君と定んと先づ其  
 評議よ及ぶ程よ一橋殿刑部卿慶喜あを正く水戸老侯  
 の子息ふく聰明英智よ渉らせらるれば恁る時勢  
 此折柄よ此卿を以て嗣君とせん支最も至當なるべ  
 しと尾州侯茂始りとし越前津山仙臺土州肥前  
 伊達の七諸侯佐倉上田の兩閣老及び石河土州本

卿丹州の兩參政等挙げし此旨議せらるるを自  
 餘の羣吏も然るべしと大半同意為たりしと唯彦根  
 中將の憶ふ仔細のゆれはあや曾て此議被肯せは本  
 来紀州菊千代殿被御養君よなされ度の御内慮も  
 在る支ゆ此君を以て嗣君と定むべしと他の異  
 見被も更待たむ今稔漸く十二歳なる紀伊宰相  
 殿を執立と躰て宗家の世嗣とし是を十四代の將  
 軍とい成しませたり此頃毎夜乾の方よゆりて  
 彗星出現し長さ大約二丈許り白き煙り被吐出む  
 が如し近年屢震災り且つ大風雨洪水河をりよ



江府の乾  
 方子て  
 毎夜彗星  
 出現を





今又憊る妖星の出る若くは天下の大凶變國土の  
 患ありと言ふ前表ふもや有んらと怕る者も多  
 うるるる亦程に故將軍家定公の俄らに薨去在ま  
 せしに就る紛々たる取沙汰も聊不審の所へ  
 りるふを彦根中將より水戸老侯深く疑ふ所  
 るゆ多種々探索致遂なる上ふは這回一橋殿致養君  
 小立んと募りて議論せし方々其他不審の廉あり  
 者致悉く幽閉せんと水戸老侯致駒込の邸に蟄居  
 し尾州越前土佐伊達各家を嗣子に譲りて別第  
 に隱居致さし一橋殿も登城を禁ぜらる其餘兩閣

老佐倉上田兩參政石河本郷奥醫師岡樂仙院多紀樂春院等  
 或は役儀致召放され或は禁錮せらる者百有餘名に  
 及びしと云ふ憊て前將軍家定の遺骸致芝増上寺へ  
 葬送あり温恭院殿と謚し追々正一位相國致宜下  
 為給ひき是より仍る御臺所を天璋院殿と稱せらる  
 然れば又京師に於ては幕吏自儘の所置致行ひ  
 獻旨をも遵奉せし輕蔑の舉動あり致深く憤ふ  
 らせ給ふより報國盡忠の公卿方を密らふ召させ  
 られ更ら水戸老侯へ内旨致下し給ふ其趣さハ  
 幕吏 朝議を後へ條約致結び且ツ親藩致擯存



ある等甚ぶ物議致察せざる者あり今強虜外に在  
り廟謨斯くの如し聖念復一日致安んせざ宜く  
夫れ幕府を輔け外夷致攘ひ衆望に副へく以て  
聖念致慰せよとの御旨あり此時殿下尚忠ある正  
しく后妃の御實父なれども當春佐倉侍従登京の  
折の關東の意に應じらまはれ疑ひ思ひ召るる  
か故に此公を除けられ近衛左府公鷹司右府公  
一條内府公三條前内府公二條亞相卿等連署して  
其頃京師に在らせし水府の臣鶴飼吉左衛門其子  
幸吉の兩人致密使として八月初旬に京師致發し

日致経て東武に赴たり駒込の邸に著し以竊ふ  
詔書致捧ぐれば老疾斜めありは歡びく有難き旨  
奉戴せらる然る小彦根中將は斯る更りや何ん  
かと敏りし思慮致回らして其臣長野主膳小命ト  
京師の事情を探らせし主膳竊りて周旋して  
内旨の下る所以致知り且つ水戸家の臣安島帶刀  
との人者一橋殿致嗣君に做さんと鷹司家の家  
士小林民部大輔及び官女村岡等と相謀るの密書  
致手小入れ其他朝紳の家士又る在京の儒者等這  
回外夷と條約の一条備へよ大老の亡状と議し



朝論成煽動する輩の其名成奉る悉く内通せしり  
 中將大い小駭きく斯る重大なる勅書とバ輕  
 輩の手と取扱せし公武確執の根成釀し國家の  
 大吏と及べると須臾も忽せよ為べしと直に  
 閣老鯖江侍從詮膳成京師に登せ所司代若狹少將  
 酒井及び内藤豊後守等と謀り這回内旨と携り  
 たる慷慨の士成嚴密に探索し先づ第一は鷹司  
 近衛三條の三公成幽閉し彼の小林民部大輔等及  
 び鶴飼父子の輩總て三十人成漸々召捕て獄舎  
 下し又東武ふても閣老參政町奉行等其組子等

よ令成りし京師の黨よ一味し者又ハ嗣君の  
 変に就く關係做したる輩成嚴密に穿鑿し水  
 戸家の臣安島帶刀以下十五人を捕縛せり是  
 仍て京師よ其頃囚捕せし輩の内有官の人を網  
 乗物とい餘を鴨雞籠に打乗せり町奉行小笠原長  
 門守の役邸より直ち小護送したり然とバ又長州  
 の藩吉田松陰を曩に洋行做さんとしと緯成ら  
 む幕府渠成其藩に遣りし禁錮をさしむ松陰把  
 憂の念益止まず争て幕府と外人成尊攘做さ  
 るめんと欲するの志頻りにあり茲に慷慨の有志等

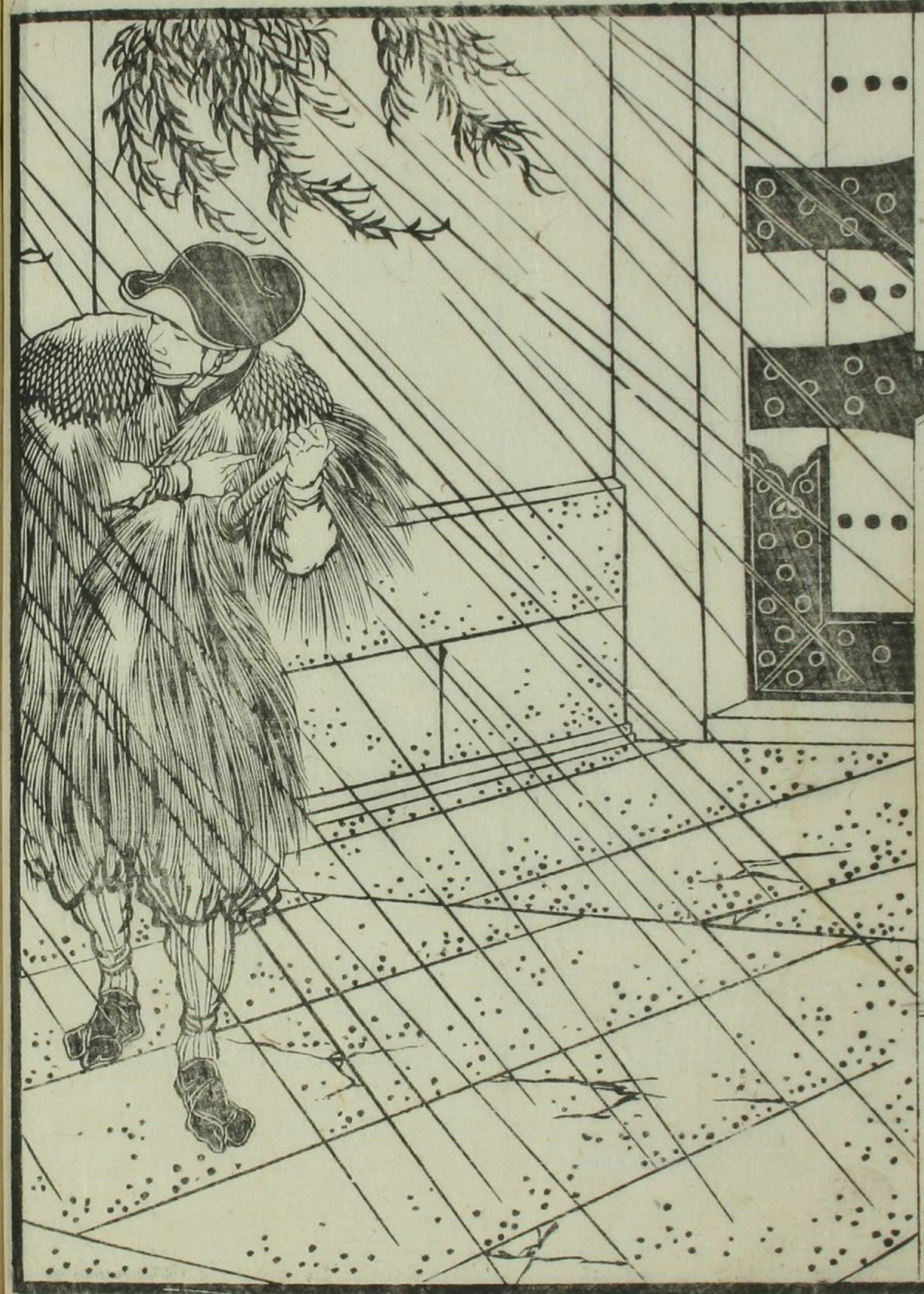
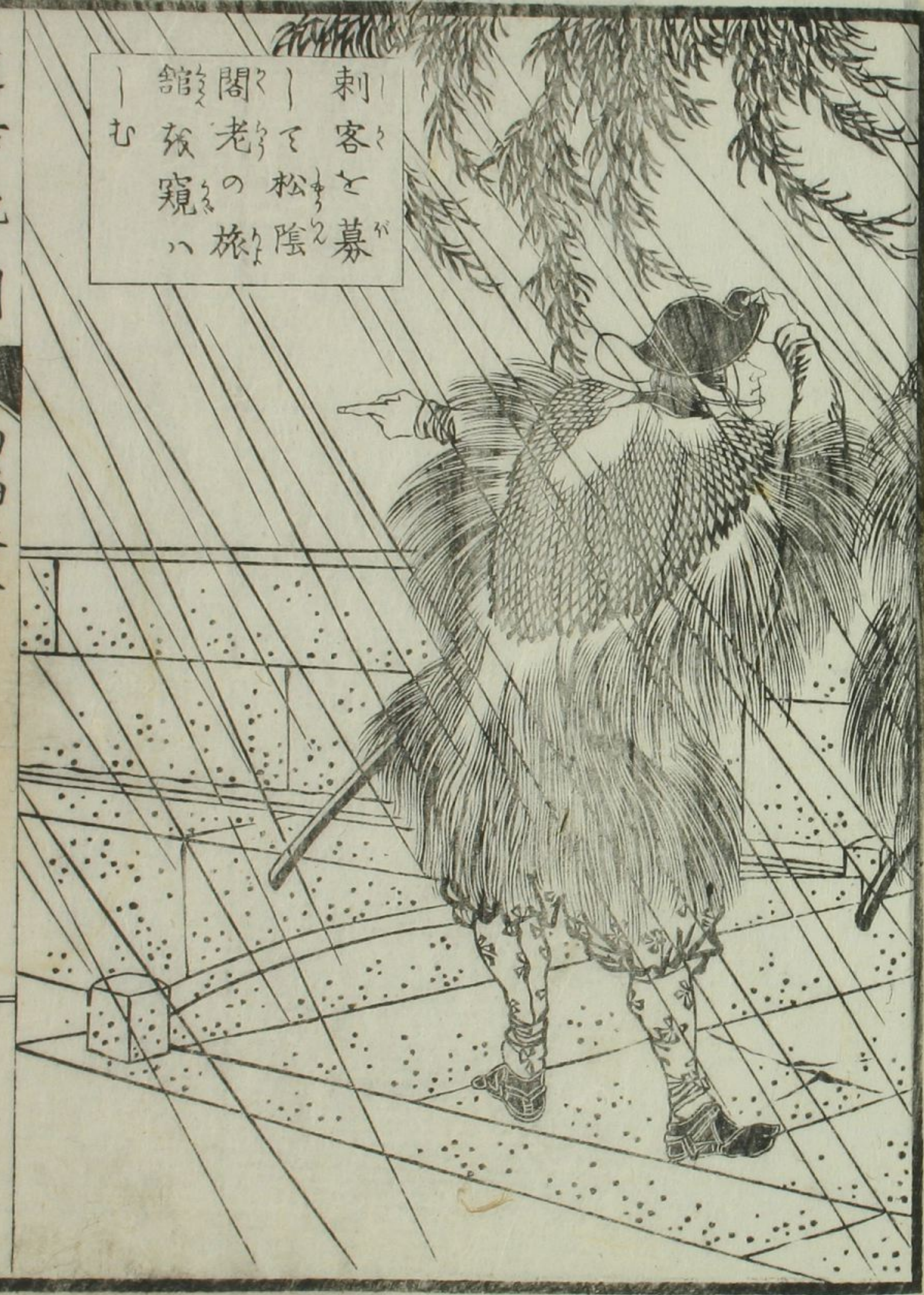


或も幕論を憤りて関東を討んとの策を竊りて  
 唱ふる所を松陰獄中よりあはれ聞き其事理に適  
 せざるを知り書を作りて諭せりと言ふ後獄を許  
 されり家より還るの時より方りて彦根中將政を執  
 りて遂に親藩離畔して幕府孤立の姿となるも  
 松陰思へらく最早幕府を輔くべからばと乃ち廷  
 臣大原三位卿重徳宛其藩に迎へ尊攘の説を起し藩  
 論を鼓動せんと竊りて彼の卿に書を呈せしは三  
 位頗る正義の人にもあはれ不應ずるの心あり然るも  
 此節鯖江侍従大老の命を受け上京し彼の三公と

幽むるの事京師に有志と唱ふる者を搦捕るとの  
 所へつるも松陰藩に在りて切齒を堪はざりて  
 刺客坂京師に遣はし圖りて閣老鯖江侍従を暗殺  
 せんと為ると雖も其策遂に調はせ爰に至るも  
 長州の藩吏等松陰が挙動の常と異なる跡を見て  
 遠く小幕議を憚りてや渠を再び獄に下せり折柄  
 禁中へ匿名の書を送りて者あり且つ梅田源次郎  
 士ある者長州に遊べる時藩士等渠と密謀を企ん  
 とせし所は是咸松陰が所為と云ふ知より  
 深く幕府の疑ひを被り同藩永井雅樂も命とて松



刺客と慕  
 松陰の  
 老翁の  
 館に  
 覗く





陰江江戸は喚取り彼のニヶ條の吏奴以て嚴しく  
鞠問を乞ふと雖も梅田が長州は遊べり頃を松陰ハ  
尚禁錮せし故渠と面会合せしなれり糸を密吏を談  
を極くもゆり又禁中へ投書の吏も曾て所以に  
知らざるを以て詳に辨解し却つて大原三位卿へ書を  
呈したる吏の趣き及び問部閣老が忠奮有志の輩は  
猥りし捕縛せしむるが故に暗殺をさんと圖りしと此  
とも艱くも陳し幕吏等いまだ其吏奴知らば爰は  
始めに實を聴て駭く吏限りなく終之を以て刑に處  
せり嗚呼惜むし松陰は博識多才ありのなるべ

加ふる義氣膽畧ありし一回航海の機と誤り  
しりや做す所として蹉跎せざるを得ず薄命奚ぞ  
斯く此如きと人其志を哀しめりと云ふ憊て十二  
月朔日頃の將軍宣下の儀式行はしむるを宰相殿  
代殿は今日より正二位大納言家茂卿と稱し  
らせ田安亞相卿慶頼を以て後見と定めしるを夫  
等の吏は今稔も暮て明年己亥六の早春に至りぬ  
れば彦根中將今はるや他は憚りるべし方もあると  
と軀く自己の權威を以て外國交際の談判を決定  
し断然武州横濱に湊及び市街を開き亞墨利加魯



西亜英吉利佛蘭西阿蘭陀の五ヶ國ありける高大の  
 商館を造営し市店民居を建連移り交易盛ん小行  
 る。あぞ更に一廓の妓樓を設け大小の娼女群集し  
 る外人の爲に情を鬻げば割烹或は劇場の属まで  
 漸々造立し恰も江府の繁栄に劣らば別之海  
 岸の盛んある五國の商船數十艘港狭しと連り  
 碇泊せしる形状を關東第一の壯觀ふして往還の  
 旅客等目張驚りせり仍ち此地に奉行を置り所  
 謂水野筑前守酒井隱岐守村垣淡路守加藤壹岐守  
 堀織部正等則ち是あり其他武州本牧神奈川羽田

大森等へ諸侯の人数若干を置て專非常の警衛と  
 して備へて精江侍従部間より去年以来滞京しと百般  
 探索し及びび々慷慨の有志挙動の黨を悉く召捕り  
 追々關東へ送り下し遂に此年二月に至り結果て  
 歸府せらる夫より先江府に於てこの這回の事件に  
 關係し禁獄せられし輩を各鞠問を遂られし之  
 裁許の沙汰に及ぶれて重き死罪或は遠流輕き  
 追放の處せらる者秋冬兩度ありと數十名に暨り  
 開が中ふ京師の儒士に頼三樹三郎と喚ぶ者の詩  
 あり因に左行に記載せり



蒼松移得在江城

三百年来晚翠清

若為穢風變其色

世間誰許木公名

此人既<sup>レ</sup>は挙動の黨<sup>ニ</sup>累<sup>ス</sup>一と殺戮せらる察<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>は  
 辞世の詩<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>ん<sup>ク</sup>此以前水戸老侯<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>屢尊攘の  
 説<sup>ヲ</sup>を以<sup>テ</sup>幕府<sup>ニ</sup>建言<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>と雖も用ひられ<sup>ズ</sup>終<sup>ニ</sup>は  
 内意<sup>ト</sup>と京師<sup>ニ</sup>奏<sup>ス</sup>是<sup>レ</sup>は仍<sup>ト</sup>く安島帶刀等<sup>ハ</sup>頻<sup>リ</sup>小緡  
 紳家を周旋<sup>シ</sup>る<sup>ニ</sup>竊<sup>ル</sup>内<sup>ニ</sup>旨<sup>ト</sup>と奉<sup>ト</sup>る<sup>ニ</sup>老侯<sup>ハ</sup>捧<sup>ス</sup>  
 げ殆<sup>ト</sup>ど公武の間<sup>ニ</sup>強<sup>ク</sup>割<sup>リ</sup>んと<sup>シ</sup>且<sup>ツ</sup>嗣君<sup>ノ</sup>支<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>就<sup>ス</sup>  
 くと只管<sup>ニ</sup>一橋家<sup>ニ</sup>納<sup>メ</sup>ん<sup>ニ</sup>の<sup>ト</sup>強<sup>ク</sup>て朝命<sup>ト</sup>と請<sup>ヘ</sup>  
 り杯<sup>ニ</sup>咸<sup>ニ</sup>帶<sup>ス</sup>刀<sup>等</sup>が謀<sup>ル</sup>所<sup>ト</sup>と雖<sup>モ</sup>偏<sup>ヘ</sup>は<sup>シ</sup>老侯<sup>ノ</sup>意<sup>ト</sup>

察<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>は故<sup>リ</sup>あり夫<sup>レ</sup>老侯<sup>ノ</sup>任<sup>ニ</sup>たる幕府<sup>ニ</sup>は輔翼<sup>ス</sup>  
 在<sup>リ</sup>今<sup>ニ</sup>その道<sup>ヲ</sup>を失<sup>フ</sup>と<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>は<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>這<sup>レ</sup>回<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>は老  
 侯<sup>ハ</sup>永<sup>ク</sup>水戸表<sup>ニ</sup>禁<sup>ス</sup>錮<sup>ス</sup>り<sup>テ</sup>斯<sup>ク</sup>の如<sup>ク</sup>は計<sup>ラ</sup>ら<sup>ズ</sup>  
 る後<sup>ニ</sup>人咸<sup>ク</sup>姑<sup>ク</sup>幕威<sup>ハ</sup>畏<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>國議<sup>ハ</sup>吐<sup>キ</sup>露<sup>ス</sup>る<sup>者</sup>  
 の何<sup>レ</sup>も糸<sup>ヲ</sup>を唯<sup>ニ</sup>彦根中將<sup>ノ</sup>専<sup>ラ</sup>幼主<sup>ヲ</sup>を輔佐<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>  
 威<sup>ヲ</sup>を海内<sup>ニ</sup>示<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>兼<sup>テ</sup>父<sup>ノ</sup>建武<sup>ノ</sup>利<sup>ノ</sup>逆<sup>ニ</sup>典<sup>ヲ</sup>起<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>  
 と報<sup>ス</sup>國<sup>ノ</sup>有志<sup>ノ</sup>輩<sup>ハ</sup>尚<sup>モ</sup>奮<sup>テ</sup>怒<sup>ル</sup>堪<sup>ハ</sup>兼<sup>テ</sup>ゆる<sup>ニ</sup>人心<sup>ニ</sup>幕  
 府<sup>ハ</sup>叛<sup>ケ</sup>り<sup>テ</sup>と<sup>シ</sup>ふ<sup>ニ</sup>斯<sup>ク</sup>十月廿七日<sup>ノ</sup>夜<sup>ニ</sup>江城<sup>ノ</sup>本  
 丸<sup>ヨリ</sup>出<sup>テ</sup>火<sup>ヲ</sup>諸<sup>ノ</sup>宮殿<sup>ハ</sup>悉<sup>ク</sup>一<sup>ノ</sup>宇<sup>モ</sup>も残<sup>ラ</sup>ず<sup>ニ</sup>上  
 一<sup>ツ</sup>餘<sup>ハ</sup>炎<sup>ハ</sup>猶<sup>モ</sup>蔓延<sup>シ</sup>て櫓<sup>一</sup>ヶ所<sup>ハ</sup>燒<sup>レ</sup>亡<sup>セ</sup>る<sup>ニ</sup>新

近世新聞 新編卷三



將軍家茂より西城へ退座あり鬼角あるうち其稔毛  
 過ぐ次の年と改元あり春ふ至り彦根侯の沙汰と  
 外國交易あり就ぐの貨幣の釣合宜しかりべし  
 古金の位は騰貴せり然バ是迄一兩は融通をいたる  
 保字小判も忽ち三圓餘の位に及び其他歩判に至る迄  
 大約あまよ比類なきのみぞ一時は物價沸騰して賤民是  
 が為に困苦増し市に苦情演る者喋々として置  
 しく這も又苛政の一端ありんと識者ハ眉を蹙しとぞ

○櫻田の上巳ふ紅雪は降ま

或時紀州の藩邸へ公用ありて赴うれ歸路喰違と  
 言へる所へ差掛りたる其折り何きより一發の弾  
 丸突然と飛来りり乗りたる駕籠は打抜しが未だ  
 武運は盡ざるみや其弾丸佩刀の柄は止まり中將  
 の身ふ恙がみり衛士等駛き且怪しき直ちふ四  
 方へ隊分は做し穿鑿し及ぶと雖も其砲發せし者  
 依見留む後此檻斫者捕縛せしき百般鞠問ふ逮  
 べども彼者更み屈する色なく我去り難き恨あり  
 て掃部頭は附規ひくど一發と打損じ終る本  
 意は遂ざる莫遺憾限りなきと言ふのゝ其餘ハ招



了せざりし一のべ日小増し強き拷問よりかり責殺さ  
 るに至りたるも更ふ一句も吐ざりしとぞ這ハ元水府  
 の産みし宇和島藩へ粮子み行たる飯田一郎と喚  
 る人ありて實多安島帶刀等と同盟做せし者ありと  
 言ふ然も彦根中將ふも其躬派窺ふ隘吟者あり  
 て暗ふ發砲せし支故豫防なくしと愧ひ難しと夫  
 よりその後姑且登城その餘の他出ふも倔強の壯士  
 派撰み常一倍の伴當と召俱し最嚴重に護衛さ  
 せしが臆したり杯世人小譏笑せしと派厭われり  
 又自己の權勢を誇りとの故あると幾程もなく衛士

派減トる平常の如く小せしと一時運の然らむ  
 る所ありし頃既に三月三日ふ至り此日を上巳  
 の嘉儀ありしが故に諸侯各登宮なり就中彦根侯も  
 其躬元老たる派以て辰の刻に太鼓と俱し我邸を  
 立出ると稍櫻田の門前より近づく夏一町計り成り  
 し頃其状田舎の社家とも思ふき打扮の者一兩輩  
 輿の邊りより找し寄りて願書派呈せんとまゝ躰を  
 り其日を前夜より雪降出しか此時に至りて弥烈  
 しく吹雪の為に闌られ尺も分るぬ程にバ  
 駕廻りの衛士等も常の輿訴と心派忽しと余をり



浪士等雪  
 中ふえ老  
 の登營  
 襲撃



近世  
 月  
 編  
 三



近世  
 月  
 編  
 三



予は春念せむ路次疾急なると往んとする時豫て計  
 りし支なりらん往方より四五名の壯士露は忽地  
 前驅し撃て蒐りし勢ひ破竹の如くなれを徒士鎗  
 持等ハ仰天一適抗撃做んとするも合羽或ハ柄袋  
 るど撥遣棄んと狼狽するうち痍傷疾負ふ者尠む  
 かづば仍も駕側の衛士等も前疾防ぐの心ゆく多  
 くも其方へ立對ひ駕の邊りの空虚せし時彼の許  
 訟人より打扮たる一兩輩疾先とて其他同志の青  
 年輩總計凡十七八名双と投連れ群がり蒐りて暴  
 卒小興丁疾破仆せば彦根の衛士等復驚き主人

小過ち何れとせりと立塞りて奮戦做せども彼方ハ豫て  
 期したる支りて肌あひ各鎖子鎧疾著し其打扮も身軽  
 ろる小這方と不意を撃ちし支りて身拵へする虚間も  
 なく敵疾四方より受けたる事ハ薄痍深痍を負はざ  
 るハ多く咸散々小討なされたる間小乗とて壯士等  
 と輿の左右より立蒐りて白双疾以て刺貫き戸疾蹴  
 破りて曳出しる會釈もなげし撃殺し凱歌の如き  
 声疾揚げ首級疾携へ立去る疾傍より付とて一個の  
 衛士が大遣のさると言ひなごり深痍をぐるも起上  
 げしガたや立つ事の慄はざるふや主人の骸より取り



付きつ天刃仰ぎと歎息せしが程もあつてせむ絶命  
 せむ時二個の衛士何れ是も重傷を被りたるが  
 彦根侯の亡骸泣々輿の裡に納め諸肩入まき昇  
 上げつ持たる血刃杖少く透逸退きたる是等の心  
 中奈何あらん後よ听くさ人哀まき然れば此日の  
 變動は於る最も烈き力戦ありん僅ら瞬息の間  
 ある小彦根侯の供方少く即死傷負を救奉る小二十  
 餘名小及びひと云ふ者此侯の登營を窺ひ斯の如  
 く小襲撃せし然奈何ある者ぞと尋る小元水府の藩  
 あり佐野竹之助小姓 廿二歳 大關和七郎大番頭 廿五歳 森五六郎馬廻 廿歳

杉山弥一郎鉄炮師 三十八歳 森山繁之助櫓方 廿二歳 黒沢忠三郎大番 廿六歳  
 蓮田市五郎寺社方 廿八歳 齋藤監物静社長官 三十九歳 山口辰之助役名不詳 二十八歳  
 廣岡千次郎以下役名 年齢不詳 増子清三郎 廣木松之助 鯉淵要  
 人 稲田重藏 林忠左工門 岡部三十郎 関矢之助 外は  
 薩藩有村次左工門等十八名あり并中は佐野竹  
 之助 黒沢忠三郎 蓮田市五郎 齋藤監物の四名は彼  
 の櫻田の事件終ると其終閣老脇坂家の邸に到り  
 我が輩ハ水府の脱藩よと名を恠々と言ふ者あるが  
 忍び難きの事故ありて同志決死の者十八人唯今  
 櫻田外は於る彦根侯を襲撃し中將殿の御首を獲



と竟素懐致遂故自訴及べる所あり委情  
る昏中よあまのりまるとく指出其文面よ中將井  
伊侯幼君致狭私意致以有司を黜陟ま其罪  
一なり芭直私謁至らざる所なり其罪二あり尾水  
越の三家を退け親藩の羽翼を剪絶ま其罪三あり  
間部閣老及ひ酒井所司代を以九條殿下致誣語  
一青蓮院の宮其他諸公卿と幽諸士庶と殺ま其  
罪四なり洋夷の恫喝は懼れ時勢致口實と一勅  
許致得び一と條約と結ぶ其罪五あり凡斯五罪神  
人共よ容れむ臣等一死天よ代りく之致誅せり因

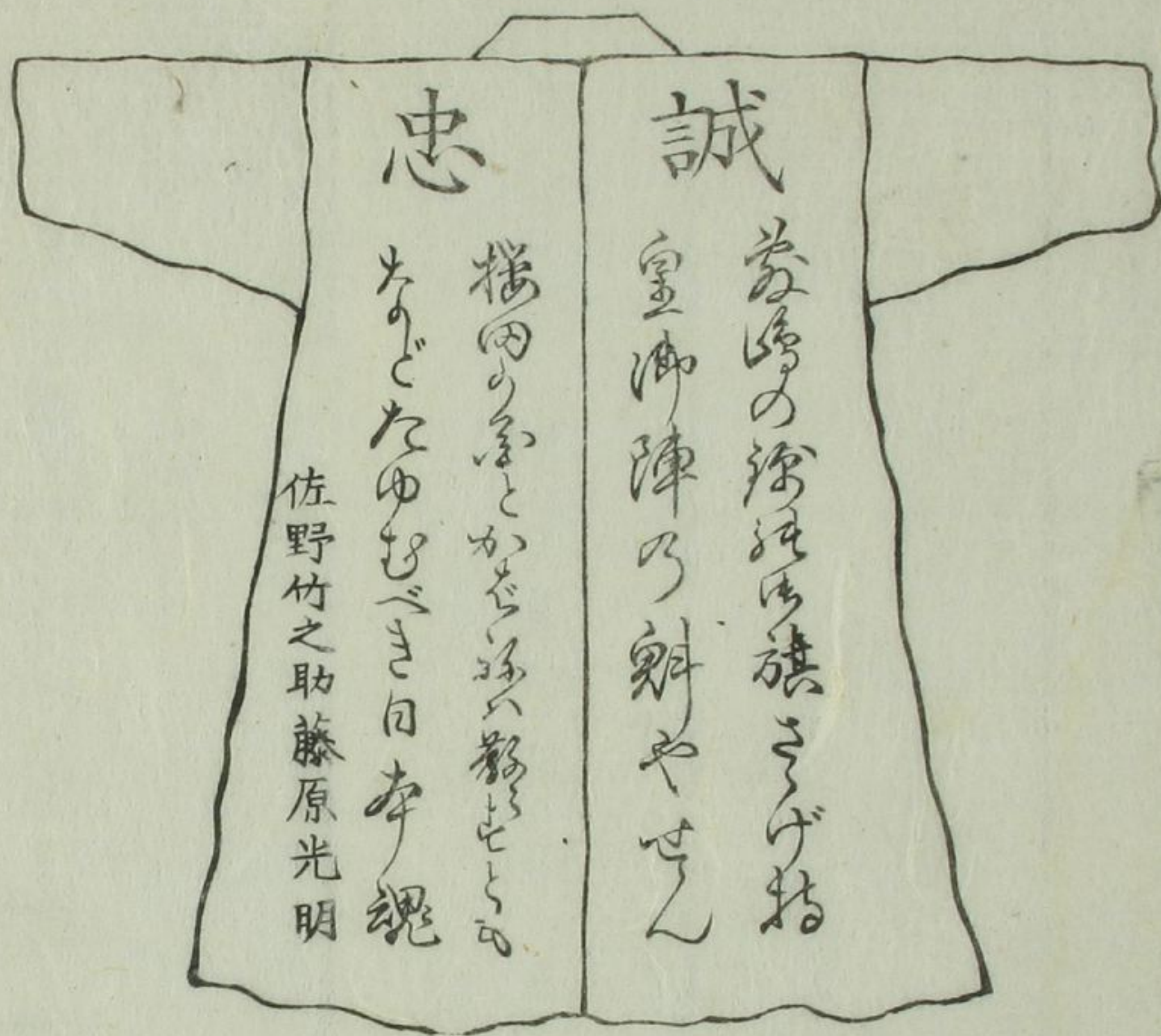
と速り死ふ就ん更致請ふとぞ書たり然バ件の  
四名の浪士も何れも痍傷致負はざるもかく苦痛  
の躰よ見へけるが就中佐野竹之助ハ衆よ勝れく  
奮戦をけん數ヶ所の重傷と被りふが更よ屈  
まふ気色もかく脇坂家の藩士より尋問せらるる  
き紙詳く小辨解せしが此應接の終る小至りく忽  
地絶命為たり一更十八人の同志の裡小毛比類  
き壯士ありと人咸惜たりとなん儲る同盟の裡  
ふ於て大関和七郎森五六郎杉山弥一郎森山繁之  
助等の四名ハ同時ニ熊本侯の藩邸に到り彼の竹



之助等が言へる如く彦根中將が撃たる旨赴を具  
 小演説せし上りて我々素志を遂たりと雖も天下の元  
 老が殺戮し之國禁を犯せしる素より存命做  
 まべくも何らび仍る其筋へ自訴なす所刑は預  
 らんと存ざれども始めに國許より出府して當所  
 の案内が曾て知らざ近頃難題の間し知れど姑くの  
 うち御扶助下され御法の通り公邊へ仰立られ賜る  
 べく且弊藩へも是等の次第御告知下し置るやう  
 偏小冀望做まと言へり後咸是等の面々ハ刑は處せ  
 られたりと云ふ諸彼の十八名のうち八人も既に

自訴し其餘ハ深疵に堪兼り路次ハ仆とて死したる  
 も何り竊し脱と去りしも在りしが其中ハ薩藩と  
 听へし有村次左衛門あり者を一ツの首級が携へて  
 龍の口迄走りしうと其躬に重傷數ヶ所ありて之を  
 行く更も慄はざらん這所は到りて自殺せり是  
 を彦根侯の首級ありとも又其藩士の首なりとも  
 其沙汰紛々たりしと然バ彼の十餘名の浪士等  
 へ去月十八日ハ水戸表が脱し上總の國富津より  
 渡船して品川に着せしうと此頃浪士の僉儀嚴し  
 く府下の旅籠屋あんじやくに謂るく止宿は肯ハ





誠  
後鳥羽の御旗を旗さげ持  
皇御陣の御やせし

忠

横田の系とかがみ羽の影とせし  
たのごとくゆびさき白本繩

佐野竹之助藤原光明

佐野竹之助

著せし襦袢あり

白羽二重よき

脊中よ斯の如き

歌二行不認め在

と云ふ

但朱字を記

載せしむるなり

○薩藩有村治左衛門所持の胴乱の裡よ

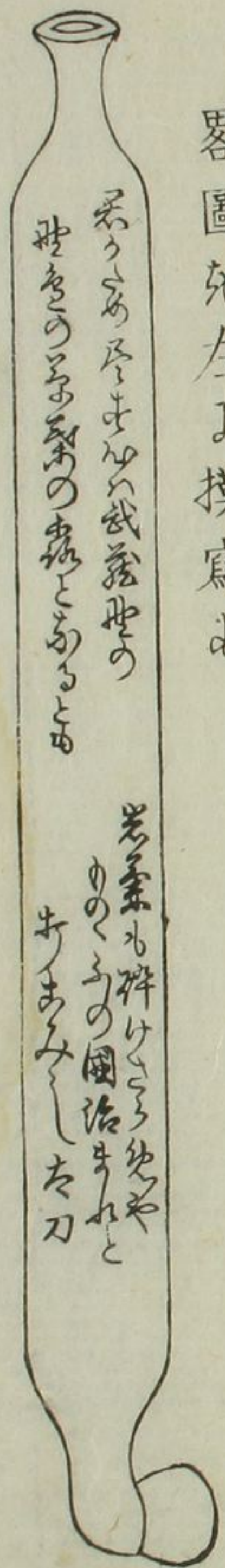
左の歌なり

君の忠を免れを辱しし海より男

名は阿波しとて明をこそまら

○又同人所持の煙器よ二首の歌彫付てなり

畧圖左よ模寫也



君の忠を免れを辱しし海より男  
名は阿波しとて明をこそまら

若葉も砕けしころ地や  
ゆのうの國治まれと  
ナアアアした刀



ざれハ這所彼所ニ僭居ク又手此三日の早天ニ愛  
 宕の額堂ニ集會シつ爰ニ豫メ計議を定め時ニ量  
 櫻田ニ到リ聽テ本懐ハ遂タルヲウリテ憊リ  
 後ニ幕府ニ於テ鎖港攘夷の令モ下サズ交易日  
 日ニ盛んナルヲ以テ天下慷慨の有志等ハ益攘夷の  
 論ヲ主張シ別テ常總二州の間ニ黨を結べる者在  
 不日横濱ニ襲撃做ス其噂專らるる小ぞ幕  
 府近傍の諸侯ニ令シテ嚴シク警備為サシメらる  
 此頃江府ニ滞在せる亞國公使の書記官「ヒイユス  
 ケン」と喚ル者遊歩の帰路三田ニ於テ斬殺セシ

せーガ折々薄暮の更なれば害せし者と見留む  
 とぞ今茲三月萬延と改元アリ十月江戸の本城造  
 營成る然る小萬延ハ僅ク小一年ニシテ翌年酉の  
 春ニ至リ又文久と改元アリ此春魯西亞人船  
 修まる紙名々々對州淺海の浦ニ上陸シ藩主對  
 徒魯人の無狀紙唱へ幕府ニ訴ふる小ぞ航ク江府  
 より有司紙遣ハ一渠と諭シテ退帆做サシむ然バ  
 まさ彦根中將專ら暴挙の計らひハ姑く幕威  
 々輝のせしニ似たるモ櫻田の変ありて後ニ幕政  
 の邪なる紙憚りモなく評論シテ怨之譏るの輩モ



のまは三百年来連綿せし徳川家の武徳爰ふ至り  
と稍衰ふるも閣老参政大小吏等相議し言る  
やう今の形勢を考ふるに朝命を遵奉し幕令を  
違背做し幕吏を侮り軽んども威勤王を竭さん  
と以故ふ朝威ハ日々盛んふり幕威ハ月々  
ふ衰へんとせり今一策を施し再び徳川氏の武  
威を奮起させんよ皇妹を関東へ娶りしよ  
小如きふと會議一決ふ及び公武御合體  
の旨趣を名とし入輿在らばん吏を奏せり此事件  
ふ至りとも彼の九條家の佞臣たる嶋田左兵衛権

大尉が専ら周旋せし依り殿下を兼諾り  
朝議小及ぶ程に諸卿の議論區々あり須  
臾に決定せざりしと彼の三卿を幽閉せし戊午の  
覆轍ふ畏怖せしとけん遂に東輿に決議して其旨  
奏聞し及をれしより更ふ五月廿八日皇妹和宮小  
宣下を給ひ親子内親王とを称し此旨関東  
へ听し幕吏等各愁眉を開きて歡喜最も斜あり  
も仍九條殿下へ関東より沙汰として國家の為  
小先年来盡力せしを賞とありて家禄千石を増  
給ひき同月下浣より西北の間ふ方り異星顯れ其



長き夏數十丈一天小薄く靡く夏恰も銀河の如く  
 六月の下旬小至り漸々薄くあり終小消へたる  
 今総八月水戸老侯卒去去享年六十三歳とぞ十一  
 月和宮中仙道致通輿りり東下為給ふ公御殿上  
 人許多陪従一と總人數凡三萬五六千小及び行粧  
 の美麗善盡さばと言ふ夏多く驛邑群致做せりと  
 云ふ始め清水殿入輿りり十二月十二日更小  
 本城小入り給ふとなり此年始めく歐州六ヶ國へ  
 使節致遣はさる茲小外國奉行致任とみ堀織部  
 正と喚るハ其性忠直小一と頗る義氣りり方今外夷

跋扈做まぬ幕吏等渠が虚喝小畏怖一 叡旨と毛  
 遵奉せば猥り貿易致許まが故小物價忽ち騰貴  
 一と貪民困苦よ逼まる夏最も慨歎不堪老と雖も  
 斯る時世小立至り一其躬卑職小在る派以と奈  
 何と毛詮術なく然ども外國の事務たるが故小我ま  
 此任小在らん限りハ御國辱よあるべき夏ハ命小  
 換と毛辨論な一と外夷小口を明らせと常小奮  
 勵し一程は假初の應接小も自然は威權現ハるが故  
 洋人も輕蔑せざり一が此頃閣老安藤侍従ハ彦  
 根中將の轍致踏とる最も狡黠あるが故小當時横



濱港ふ於る交易盛んか上り府下ふも商館を設  
 けたき昔外人より望ふ任せ今御殿山ハ無用の  
 地あれハ八萬坪の地を割る貸與へんと議せらる  
 織部正ハ肯ぜば抑品川ハ江府の咽喉めて夫ふ  
 連ある山岳ハ最大の要地あると外夷ふ與へ給はん  
 ろハ後害必然たるべき昔我辞我盡し理を推て憚る  
 色なく抗辯せしりと安藤侍従ハ其躬閣老たる  
 の威権我奮ひ反つと直言を暴論と墮し渠我幽閉  
 ありしめし織部正ハ憤激し堪へむ其臣三島三  
 郎兵衛を召さ君辱しめらる時ハ臣死はと言へり你

此語我忘るふと遂に割腹為たり我人咸悼  
 ありとぞ然し三島三郎兵衛ハ主人の憤死を遂  
 たるは是咸安藤閣老の做せ所為ありと憶ふふを  
 私の怨むるのこゝろ元來閣老の所行たる天朝  
 我蔑視し醜夷し諂諛し甚しきふ至りてハ幕府我  
 不義ふ陷れ萬世までも尊名我穢さんと謀りたる  
 天下容れざるの國賊ある小主人が末期の一句も在  
 る我決死して侍従殿を斬殺するは有らむんハ  
 臣たるの義し背けり爰大の奮發して同憂の  
 浪士と聞へ豊原邦之且細谷忠齋吉野政助淺田



儀助相馬千之助等と相長し之時の至ると後程小  
 其稔もろや空しく暮て翌年文久二年正月十四日小至  
 り同志の甲て示し合せと西國横山町に居住做せ  
 太田道育水戸老族の年五師と云が許小會合し明朝登城の折は  
 窺ひ必き素懐は遂ぐべしと其盟約よ及びしとそ是  
 より坂下の事件小至るは此編中よ綴らんとする小  
 豫て紙負の定額られハ開ハ次輯の卷首小記載する  
 茲見るべし

近世紀聞初編卷之三終

彫師 渡辺栄藏

東京

通 壹丁目	北 白 茂兵衛
同 二丁目	稻 田 佐兵衛
芝 三嶋町	山 中 市兵衛
通 二丁目	小 林 新兵衛
横山町壹丁目	出雲寺 萬次郎
浅草茅町二丁目	北 澤 伊 八
横山町三丁目	太 田 金右衛門
本銀町二丁目角	山 中 孝之介
馬喰町二丁目	田 中 治兵衛
通 油 町	水 野 慶次郎
馬喰町二丁目	山 口 藤兵衛
横山町二丁目	辻 岡 文助 發兌

書肆



